

Cultural Sociology: Cultural Turn に対する 新機能主義からの返答

—社会学における意味論的転換の一側面—

Cultural Sociology: Response from Neo-Functionalism
to Cultural Turn

— One aspect of semantic conversion in sociology —

白石哲郎

要 旨

後期近代に入り、これまで社会学理論の主導的な地位にあった構造機能分析を超越せんとする動きが相次いでみられるようになった。それは具体的には、H.G.ブルーマーの象徴的相互作用論、P.L.バーガーの現象学的社会学、H.ガーフィンケルのエスノメソドロジー、J.ハーバーマスのコミュニケーション的行為理論、N.ルーマンのオートポイエシスのシステム論、J.C.アレクサンダーらの新機能主義の抬頭に象徴される。いずれのパラダイムも、既存のパーソンズ社会学に対しては異なるスタンス——「脱却」か「継承発展」か——に立ちながら、人間ないしシステムの「意味(meaning)」という見地から「行為」や「社会」、あるいは「文化」の再定義をはかる姿勢においては通底していた。なかでも、「文化による社会の意味的編成」の問題にセンシティブなまなざしを向けたのが、新機能主義の嚮導として知られるアレクサンダーである。

本稿では、社会における無意識的な「生の意味」を探る「或る種の社会精神分析学」として構想されたアレクサンダーの文化理論=Cultural Sociologyにかんして、20世紀後半から今世紀初頭にかけて社会科学の諸分野でプレゼンスを増してきたCultural Turnとの相似性に着目しながら、その特徴を明示する。Strong Program（文化の自律性や解釈の問題に対する理論的・方法論的なコミットメント）を標榜するCultural Sociologyは、パーソンズ流の機能主義的=システム論的枠組よりもむしろギアーツ流の解釈学的=記号論的枠組に準拠しており、このような傾向は、Cultural SociologyとCultural Turnとのホモロジカルな関係を注視するわれわれに、パーソンズ以降の社会学およびその他の社会学に生じた意味論的転換の潮勢を強く印象づけるものである。

キーワード：意味、新機能主義、Cultural Sociology、Cultural Turn、意味論的転換

1. パーソンズ以降の機能主義的 sociology

1.1. 新機能主義—アメリカにおける

パーソンズ・ルネッサンス

1960年代後半を契機として、社会秩序の維持・均衡の機序を問うT.パーソンズの構造機能分析は、行為の能動性に重点を置くミクロ社会学から公然と批判されるようになる。象徴的相

相互作用論にせよ現象学的社会学にせよ、行為者の意志的な努力（主体的な解釈や選択）が社会的生活世界を記述するための唯一の手段とされるが、行為者=生活者の主観的見地に立脚したアプローチは、観察者=研究者の客観的見地に立つパーソンズ流の機能主義との決定的な対立軸を示すものであった¹⁾。

ところがパーソンズの死後しばらくして、「新機能主義（neo-functionalism）」と呼ばれる運

動がアメリカで抬頭する。その登場は、70年代末から80年代初頭にかけてドイツで最初に興った所謂「パーソンズ・ルネッサンス」に端を発している。ドイツにおける機能主義再考の象徴的な動きとして、パーソンズ社会学の体系的な検討をととしてN.ルーマンがオートポイエシスのシステム論、J.ハーバーマスがコミュニケーション的行為理論を相次いで提唱したこと、さらに『社会学雑誌』(*Zeitschrift für Soziologie*, 1980)においてパーソンズ特集が組まれたことは、「反パーソンズ」、「脱パーソンズ」の風潮を背景に機能主義の凋落期にあったアメリカの社会学界に衝撃を与えた。事実、新機能主義は、「パーソンズ理論のなかで正当に評価すべき箇所とそうでない箇所との腑分け作業……パーソンズ理論のなかで受け止められるべき遺産の探究」(佐藤 勉 1997:250)に着手したルーマン、ハーバーマス、W.シュルツター、R.ミュンヒらドイツの社会学者を中心とする新たな理論的動向を受けてアメリカで勃興した、第二のパーソンズ・ルネッサンスといえる現象であった。

新機能主義の担い手は、主にパーソンズの孫弟子達であるが、若い世代に触発され、師の理論体系の再検討を試みるようになったM.ゲールドやN.J.スメルサーらかつての直弟子の参入も認められる。彼らの多くはパーソンズの業績について、前期の行為論的パラダイムを評価する一方で、「サイバネティック・コントロール・ハイラーキー」の発想に支えられた後期にかんしては、概念図式の抽象化精練や価値・規範への還元主義的アプローチゆえに、むしろ後退とみなすきらいがある。

斯かる傾向は、パーソンズ社会学の「継承発展」の企図と密接にかかわっており、このことは新機能主義のパイオニアとして知られるJ. C.アレクサンダーの議論の変遷をたどることで、ある程度裏づけられるであろう。実際に彼は、「規範的要素をサイバネティック・ハイラーキーの上位に置き、物質的要素を下位に置いたので

ある」(Alexander 1990=1996:56)との発言に判明なように、後期パーソンズ(Parsons 1966)の一般行為システム論に対して規範主義的偏重という批判的な評価を下している²⁾。「パーソンズは、マルクスを無視したばかりでなく、結果としてマルクスを押し殺してしまった。これに対して、私(Alexander, 1982b)は、物質的・手段主義的理論家を無視しようとしてきた点でパーソンズを批判するものである」(Alexander 1990=1996:65)。

「新機能主義」という用語が耳目を集めるきっかけとなったのは、1984年のアメリカ社会学会(於:テキサス州サンアントニオ)で開催されたミニ・カンファレンスにおいてであり、この討論会を主導した人物こそ、ほかならぬアレクサンダーであった。彼は自らの立場を新機能主義と呼称することによって、主流派社会学としてのパーソンズ理論の地位を継承せんとする意気込みを示したのである(高坂 1986)。

これより本節では、独自の文化理論が構想されるに至るまでの、初期から中期にかけてのアレクサンダー社会学について概説したい。

1. 2. 新機能主義の理論的関心

—マイクロ・マクロ・リンク

アレクサンダーをして、新機能主義のリーダーの地位に据えらしめるきっかけとなったのが『社会学の理論論法』(1982-83)である³⁾。彼はこの四巻からなる大著のなかで、マルクス、デュルケム、ウェーバー、パーソンズの徹底した再検討を試みるが、とくにパーソンズの『社会的行為の構造』(1937)を「理論前提的議論(presuppositional arguments)」の先駆的業績に位置づけている(Alexander 1983)。前期パーソンズに対する新機能主義の強いコミットの証左といえる理論前提的議論とは、行為や社会秩序の認識をめぐって対立あるいは競合関係にある社会学諸理論の間に「対話」の経路を開くことによって、リンケージすなわち連携・連合を

可能にすることを指している。

かつてパーソンズは『社会的行為の構造』において、西欧思想の二大潮流をなす実証主義（マーシャル、パレート、デュルケム）と理念主義（ウェーバー）双方が抱えるジレンマ——規範的要素の排除／条件的要素の排除——を解決する方途として、ふたつの立場の相互作用の過程をバランスよく内包している主意主義的行為理論を提唱した。このときパーソンズが企図していたのは、相互に排他的な実証主義と理念主義の「統合」であり、両者のリンケージを導く「媒介者」としての役割を主意主義に付与していた。アレクサンダーは、パーソンズの「古典的な」理論前提的議論を継承し、60年代から80年代初頭にかけて専門分化した社会学諸理論に共通の「対話」の場を提供することに関心を注ぐようになる。新機能主義が「パーソンズの見直しをはずみとして現代社会学理論の新展開をはかる理論革新運動」（佐藤 勉 1997：253）たり得る最大の根拠は、ダイバージェンス（相違）の戦略、つまりは理論前提的議論の積極的な採用にあるといっても過言ではない。

アレクサンダー自身によるリンケージの目的は、「行為と秩序の多次元的な認識を可能にする理論枠組」（鈴木 1997：46）の獲得にあり、国家や権力といった社会構造の条件的要素、あるいは行為の主観的要素（行為者の内発的な意思と努力）などパーソンズ社会学に不足していた知見を異なる理論的諸伝統から摂取することは当然の要請といえた。また同時に、斯かる多次元化の取り組みは、パラダイムの濫立によって加速した還元的な理論化傾向に歯止めをかけることを企図したものであった⁴⁾。

具体的には、社会秩序の問題に重点を置く客観主義的パラダイムと行為のコンティンジェンシー問題に重点を置く主観主義的パラダイムとの「ミクロ・マクロ・リンク」の道が探求される。アレクサンダーが、斯かるリンケージの先に見据える「多次元的な」社会学理論とは、行

為＝秩序問題についての多層的な言説を可能にするような理論のことを意味している。一般的に、行為へのアプローチは「規範的」か「条件的」か、秩序へのアプローチは「個人主義的」か「集合主義的」かによって区別されるが、社会学の理論分野では、これらの組み合わせに応じて機能主義（規範的－集合主義的）、構造主義（条件的－集合主義的）、象徴的相互作用論（規範的－個人主義的）、交換理論（条件的－個人主義的）に領域化される。

実際にアレクサンダー（Alexander 1988a）は、『『現実の個人 actual individuals』の行動は規範という条件とは完全に分離されている」とみなすホマンズの交換理論と「意味は個別行為と他者の反応とによって決定される」とみなすブルーマーの象徴的相互作用論をとりあげ、これら「反集合的なミクロ社会学」と、「行為を規範的なものとしてとらえようとする傾向」ゆえにコンティンジェンシー（既成秩序にとって不確定要素をなす行為を通じた社会規範の変革ないし創造）を残余範疇として扱う「集合主義的なマクロ社会学（主にパーソンズ社会学）」との理論的な総合の可能性を追究する。このように還元でも融合でもなく、あくまで多次元的な理論編成のために、社会学の独自の理論分野としての機能主義と他の理論分野との対話的關係を論証することに初期のアレクサンダーの関心は集約されている（鈴木 2014）。つまり新機能主義は、「ほかのどんな理論化よりも総合をめぐす理論化の一形態となること」（Alexander 1990=1996：48 傍点：引用者）に自覚的な運動として出発したのである。

1.3. 新機能主義の実質的関心

ーリサーチ・プログラム

新機能主義のもうひとつの特徴として、「リサーチ・プログラム」と呼ばれる経験的な調査研究があげられる。これは、理論面での過度な抽象性と難解性を批判されてきたパーソンズ社

社会学に、第二次世界大戦後のアメリカが直面する市民的統合や民主主義の危機といった実質的な内容を与え、それら現実的な諸問題への応用可能性を証明する試みである。アレクサンダーにとって、パーソンズの機能主義は『『集合主義的で規範主義的な理論』を意味しており、そこで導入される分析枠組は、普遍主義的価値・規範の制度化・内面化の過程を図式化するために考案された比較的単純な因果連鎖モデルとなっている」(鈴木 1997: 6)。つまりそれは、人間行為の学際的＝総合的な把握を企図して50年代前半に定式化されたシステム三分割モデルであり、道徳的な価値体系(文化システムの「規範的要因」)の社会システムへの「制度化」(役割期待の構成)とパーソナリティシステムへの「内面化」(欲求性向の構成)の分析が一義的に志向された。新機能主義では同モデルを発展的に引き継ぎ、これを理論的な基礎(フレームワーク)に据えたフィールドリサーチを展開していく。

当初アレクサンダーの実質的関心は、分裂傾向にある多様な民族集団が、各々の「原初性」(人種、言語、信仰、領土的起源)を維持した状態でいかに包摂され得るかに向けられていた。ここでの「包摂」とは、「個人がターミナル・コミュニティの完全な成員であると感じられる」(Alexander 1980=1996: 101) 一体感を獲得する現象学的経験として捉えられている。またその進展は、「原初的なもの」(コア集団＝ホスト社会成員の中核的なエスニシティを基盤とする同化主義的なもの)から「市民的なもの」(外集団＝エスニックマイノリティの政治的、文化的な諸権利を保証し尊重する多元主義的なもの)へとターミナル・コミュニティ——「個人が統合を意義あるものと感じる場合のもっとも広い意味での連帯集団」(Alexander 1980=1996: 101)——が移行していく程度によって測られるという。

パーソンズが社会的マイノリティの単線的な包摂過程を想定していたのに対して、アレクサ

ンダーはより複雑で多様な包摂過程に着目しており、システム分化の程度に応じた連帯の変異パターンや、国民的コミュニティの連帯とその他のコミュニティの連帯とのコンフリクトについて議論する。「もっとも重要なことは、すべての国民社会が歴史的コアを持つがゆえに、市民的統合が一様に進まないという点である。……コア連帯と市民的連帯とのあいだの緊張こそが現代の包摂理論の前提とならねばならないのである」(Alexander 1980=1996: 104-5)。

アレクサンダーによれば、エスニック外集団の包摂は、「外的・環境的な要因」(社会における経済システム、政治システム、統合システム、宗教システム)の分化が進めば進むほど、またパーソンズがあまり考慮に入れなかった「内的・意志的な要因」(コア集団と外集団双方の原初性をめぐる関係)が相補的なものであればあるほど、「市民的な」水準に至るという。

リサーチ・プログラムが、あくまで新機能主義の見地に立った実証的な市民社会研究である以上、その批判的なまなざしは、パーソンズのアメリカ論が孕むオプティミズムに向けられている。留意しなければならないのは、新機能主義が、とりわけリサーチ・プログラムの水準において「パーソンズ理論の汎用性と普遍性」を証明しようと努める点にある。アレクサンダーの場合、アメリカの共通価値——「現世的な道教的活動主義」と「制度化された個人主義」——にもとづくコア連帯を社会統合の理想形態と素朴に同定するパーソンズ(Parsons 1964)の保守主義的人道主義を批判しつつ、彼が擁護し信奉し続けた普遍主義実現への道をアメリカの市民社会研究の文脈で模索した。それはつまり市民的連帯とコア連帯との調和、前者の保証を前提とする後者の達成という難題である。畢竟するにリサーチ・プログラムは、パーソナリティ、集合体、文化の分化が進む近代社会の統合、すなわち「社会秩序の持続的な確立」というパーソンズ畢生の関心を礎石に据えているのである。

2. 新機能主義の文化理論 —Cultural Sociologyの概要

2.1. 文化の機能主義的＝システム論的 アプローチから解釈学的＝記号論的 アプローチへの転換

2000年代に入ってからのアレクサンダーの関心は、専ら「文化」それ自体の理論化に向けられている。彼の提唱するCultural Sociologyとは、社会における無意識的な「生の意味」を探索する「或る種の社会精神分析学」(Alexander 2003)であり、文化の内的コードを解読しようとするところに方法論的な特徴が見出される。

実際に、文化の解釈学を志向するアレクサンダーが導入したのは、ソシュール流の記号学やギアーツ流の解釈人類学といった、文化の意味論的研究に取り組むうえで不可欠なパラダイムであった。われわれはここに、社会学の理論化はつねに実証的なものであらねばならない以上、人文学の理論化とは一線を画すべきという当初の姿勢から離れ、自ら人文系領域へ越境していこうとする＝「ジャンルの混淆」(Geertz 1983)を実践しようとするアレクサンダーのスタイルの変化をみるのである。

アレクサンダーの社会学は、①行為＝秩序問題をめぐる理論的統合、②人種・エスニシティの「包摂」にかんする調査研究、③解釈学的見地に立った文化の理論化という流れで展開されてきた。①と②の段階(80年代～90年代)までは、パーソンズの行為システム論の継承発展が企図されていたが、③の時点(2000年代)では、そうした新機能主義を旗揚げした当初のテーマが後景にしりぞき、後述するCultural Turn(文化論的転回)の潮流を意識したかのようなアプローチがとられている。

本節で着目すべきなのは、②と③をつなぐ一連のウォーターゲート論である(Alexander 1984, 1986, 1988b)。そこで強調されたのは、事

件の発覚によっていったんは分裂の危機に直面したアメリカ社会が、真相究明のための公聴会を転機として再統合へと収束していく過程であった。アレクサンダーは同過程を、「文化－社会統合」の三つのモデルをもとに考察しようとする。これらは「価値と社会構造との関係を分析するための理念型」であり、彼によればウォーターゲート事件は、「文化的特定化(cultural specification)」でも「文化的コラム化(cultural columnization)」でもなく「文化的屈折化(cultural refraction)」を経たからこそ、最終的にアメリカの政治的文化を確固たるものにし得たという。

「文化的特定化」は、多様な価値が様々な集団の間で分有され、かつそれらが広い合意のもとで対立することなく調和されている状態を指す。これは、パーソンズとプラット(Parsons and Platt 1973)が展開した議論のなかにその典型を認めることができる。両名によれば、「合理性」というアメリカ社会に支配的な価値が、四つの下位システムに調和的なかたちで「制度化」されているという(適応：A＝経済的合理性、目標達成：G＝政治的合理性、統合：I＝シチズンシップ／連帯的合理性、パターン維持：L＝価値合理性)。「文化的コラム化」は、何ら共通の価値をもたない複数の社会集団の間で生ずる恒常的な対立状態を指す(「コラム」と表現するのは、各集団が自分達のコミュニティの囲いのなかで垂直的に統合されているためである)。「文化的屈折化」は、先にあげた二つのモデルの中間形態といえるものであり、複数の社会集団の間で対立が生じているにしても、「依然として統合された価値システムに基礎を置いている」ケースが該当する。

アレクサンダーによるウォーターゲート論の眼目は、公聴会の場で民主党本部への侵入事件やそのもみ消し工作に政府高官が関与していた事実が白日のもとにさらされたことで、ニクソン派と反ニクソン派との対立は深刻なもの

なった——両陣営ともにアメリカ国民として、すぐ後で述べる普遍主義的な価値を信奉していたことは、事件が「文化的屈折化」の経験的事例であることの証左といえる——ものの、結果的にアメリカの民主主義の根幹を支えてきた文化的価値——立憲政の自由や「公正」・「平等」の理念——とともに、社会的連帯の再生と強化がなされたという事実にある。

アレクサンダーは当初、システム論的な枠組を用いて事件の経緯（文化的屈折化～再統合）を記述分析することに重点を置いていたが、途中からは後期デュルケムの宗教研究を足掛かりとして、ウォーターゲート事件を「意味あるシンボルのパターン」として読み解く解釈学的アプローチを志向するようになる。そして彼は、同事件の意味論的研究を端緒に、人文科学を中心にアカデミック・シーンを席卷していた「西欧の文化論」（解釈学のおよび構造主義的な人類学や記号学）の知見を、自身の文化社会学すなわちCultural Sociologyを構築するための理論的および方法論の武器として積極的に導入していくのである（鈴木 2006）。

パーソンズも終始、文化を前提に据えた社会学理論化を目指していたといえるが、後期になるにつれ規範決定論的な色彩を濃くしていったこともあり、文化それ自体の「意味」を追究する方向に向かうことはなかった。「AGIL」という「理論モデルにかんして言えば、機能とシステムは、相互に関係しているが、相対的に独立している部分からなる社会を記述するために採用されている。……しかし、パーソンズがこのモデルをサイバネティック・システムとして組みかえたとき、社会システムの諸要素のなかの一組にすぎない『規範』の方に傾いていった」（Alexander 1990=1996：56）。80年代の後半を契機に、アレクサンダーが儀礼という物質性や身体性に基礎づけられた「デュルケムのシンボリック・文化的要素を強調する」（Alexander 1990=1996：65）ようになったのは、文化のな

かでも規範を偏重するパーソンズ社会学に限界をみたからである。

パーソンズ流のシステム論からデュルケム流の儀礼論への転換を機に、アレクサンダーはアメリカ市民社会における「象徴体系」の社会学的解釈を試みるようになる。とくに中盤以降のウォーターゲート論では、（アメリカ至上初めて現職大統領が辞任に追いやられたという意味で）「道徳的なシンボルパターン」に再定位された事件全体のうち、ニクソンはアメリカ的価値を体現する「聖なる存在」から市民社会と敵対する「俗なる存在」へと成り下がる「シンボリックな人物」として、また公聴会は汚されたアメリカ的価値を再び神聖なものとして浄化する「儀礼」として描出された。

こうしてアレクサンダーは、「社会界」における「実在を作っている」観念（idée）＝意味の乗り物（vehicle）としてシンボルを捉えたデュルケム（Durkheim 1912）に立ち還ることによって、「解釈と説明の枠組」を提供するような、すなわち「より正確な理解を提供する文化社会学的な理論モデル」（Alexander 1992=1996：130）の定式化に向かうのである。斯かる取り組みにあたり彼が第一次的な立脚地としたのは、認識、感情、道徳を含む思考一般の運び手（vehicle）としてシンボルを捉え、この複雑に絡みあう「観念の糸」を解きほぐすことに照準する「解釈人類学（interpretive anthropology）」を提唱したC. ギャーツであった。

R. ベネディクトの『文化の型』（1934）やS.K. ランガーの『シンボルの哲学』（1957）の影響下にあるギャーツにとって、文化は「人間が生活に関する知識と態度を伝承し、永続させ、発展させるために用いる、象徴的な形式に表現され伝承される概念の体系を表わしている」（Geertz 1973=1987:148）。したがって、ギャーツが文化を「意味をもつシンボル体系」あるいは「意味のパターン」として強調するときの「意味」とは、幾重にも連結され、また共有された

観念、認識、情調、知識を指しており、このことは「文化が公的なものであるのは意味が公的だからである」(Geertz 1973=1987: 20) との主張からも窺い知ることができる。

アレクサンダー (Alexander 1987) はギアーツについて、文化の集合的な定義 (the collective definition of culture) がその後、解釈の問題 (the problem of interpretation) に引き上げられたと指摘し、彼の言語、絵画、神話、儀礼などをめぐる「意味の公共性 (社会性)」の理論は解釈学的方法と直結していると説明する。実際にギアーツが、「文化の概念は……本質的に記号論的 (セミオティック) なものである」(Geertz 1973=1987: 6) 必要性を説いたのも、所与の象徴群に歴史的・社会的に刻み込まれている「意味の重層性」を読み解く「厚い記述 (thick description)」の実践に重きを置くためである。文化研究における「理論構成の基本的課題は、抽象的規則性を取りだすことではなく、厚い記述を可能にすることであり」(Geertz 1973=1987: 44)、斯かる課題ゆえに、おのずから「概念化というものは、まさにすでにえられた資料の解釈を行うことに向けられる」(Geertz 1973=1987: 46) のである。

2. 2. Cultural Sociologyが標榜する Strong Program

アレクサンダーの構想する Cultural Sociologyは、そのじつ“Strong Program”の文化理論である。ここでのStrong Programとは、「社会生活の形成」という文化の果たす能動的な役割や文化自体の意味を強調する理論的・方法論的なコミットメントの総称を指している (Alexander 2003)。このプログラムにおける最優先課題は、「文化的自律性 (cultural autonomy)」の把握に置かれているが、斯かる特性を明らかにするうえで求められるのは、社会構造から分析的に切り離された「独立変数としての文化概念」である。

アレクサンダーによれば、「意味生産行為のパターン (pattern of sense-making activity)」に最大の関心を寄せる科学研究の新しい諸分野が、Strong Programの社会学的発想から影響を受けており、実際にそれらは、文化的・言語的な枠組と法則にいつそう依拠するようになっていくという。例えば、ソシュールに代表される構造主義的な記号概念 (Signe) はそのひとつである。たしかに、記号をバイナリーな「価値体系 (système de valeurs)」とみなすソシュールの発想——言語の価値すなわちシニフィエ (概念) は、相互に類似した音のイメージとしてのシニフィアンとシニフィアンの対立関係によって規定されており、この二項間の示差的構造は、同じ言語共同体に所属する構成員の脳裡の記憶に共通に貯蔵されている——がもつ有効性は、C.レヴィ=ストロースによる一連の神話研究によって証明されている。この事実は、言語ほど明確に組織されていなくても、その他の文化的事象も同じく無意識的な記号のシステムに基礎づけられた存在であるということを示唆している。

ただアレクサンダー自身は、類似と差異にもとづく記号のシステムが社会的環境と文化的環境の双方と密接に関係しているという立場から、記号学の限界を乗り越えるための鍵概念として、「社会システムの関係に対して明確なレファレンスを具体化するシンボルのセットである」(Alexander 1992=1996: 136)「言説」を呈示する。これは、記号 (厳密にはシニフィアン) 同士の「連合的配列 (coordination associative)」(Saussure 1910-11)を構成員に社会化し、具体的な集団や制度に結びつける「社会的言語」として機能する。いずれにせよ、「解釈と説明の枠組」を社会学の文化理論に導入するという目的からすれば、「言語的なもの」として文化を捉えなおすことは、戦略的にきわめて重要な手続きなのである。

一方でアレクサンダーは、Cultural Sociology

によって乗り越えられるべき旧態依然のアプローチとして、Sociology of Cultureを対置させる（Alexander 2003）。これは、「疎外」や「ハビトゥス」といったコードに因襲的な“Weak Program”の文化理論を指している。斯かるプログラムは、文化を従属的でアンヴィバレントな変数とみなす従来の社会科学におけるコミットメントの総称である。つまりSociology of Cultureは、階級、権力、市場といった「社会的なるもの」によって規定される受動的な存在として、文化を所謂「上部構造」の地位に限定してしまうのである。

アレクサンダーは、ふたつのプログラムの間に横たわる（文化の）定義づけをめぐる相違が、方法論的に記述できると指摘する。Weak Programの場合、文化は、実証主義的コミットメントの文脈において、単純に社会構造の付帯現象として扱われるか、実体的な価値、規範、イデオロギー、あるいは物神性（fetishism）の抽象的記述に還元されるのに対して、Strong Programの場合、文化は解釈学的コミットメントの文脈において、意味をもつ社会的テキスト（social texts）として措定される。斯かる概念規定によって、専ら「形式合理性」や「道具的理性」の観点から批判的に言及されてきたテクノロジーも含め、文化は社会関係の広大な領域を有意味的に構成するシンボリックな存在として描き出すことが可能となる。Strong Programにおいて最も重要な原理に位置づけられている「文化的自律性」とは、アレクサンダーの表現に倣えば、それら自体は空虚な器にすぎない社会構造、価値、イデオロギーが、「象徴的意味（symbolic significance）」という豊かなワインで満たされることなのである。

自著のなかで、わざわざ一章を割いてまでギアーツの思索について論述している事実からも、「文化の分析は解釈と再構成からなる」（Alexander 1992=1996：133）と言明するアレクサンダーが、解釈人類学に強くインスパイア

されていることは明らかである⁵⁾。実際に彼は、「複雑に絡みあう意味を構造的にそなえたシンボル」という文化の捉え方について、それがギアーツに従ったものであることを認めている（Alexander 1987）。Strong Programの実践にあたっては、ギアーツ流の「厚い記述」のための文化的・言語的コードが求められるが、そのコードこそ、社会的な意味の網を紡ぎ出す「ナラティブ（narrative）」であり、そして「シンボル（symbol）」なのである（Alexander 2003）。

アレクサンダーが、ギアーツの解釈人類学をディルタイの哲学的解釈学の「最も強力な現代へのアプリケーション」と評価するのは、後者が、「含蓄（connotation）」（S.K.ランガー）ないし「共示義（connotation）」（R.バルト）の次元で何重にも絡みあう象徴的意味を理解する手法としては不十分だからである。ディルタイ（とくに前期）にとっての解釈（Auslegung）とは、文学的な「生の表示」を対象に、著者の「体験」を「自己移入（Hineinversetzen）」によって追構成していく過程である。作品に個性をもたらししているのは、そうした創作活動としての「体験」にほかならず、「言葉が確固たる基盤を提供し、偉大な、いつまでも貴重な創造」（Dilthey 1900=1973：47）を遡行していくことで最終的に了解が目指される意味こそ、天才的な著者の意識されざる精神であった。「解釈学的手続きの最後の目標は、著者自身が自分を了解していた以上によく、著者を了解することである」（Dilthey 1900=1973：40）。

翻ってギアーツにとっての解釈（interpretation）とは、民族誌的な「生の表示」——後期ディルタイの用語法における「客観的精神（精神の客観態）」のごとき、特定社会の共同主観性が書かれたもの、語られたもの、為されたものの諸形式として客体化された象徴群——を対象に、多様な読み手（日常生活者達）が付与した精神内容の重層性を、固有の歴史のおよび社会的脈絡に照らしあわせることで紐解いてい

く過程である。いわばそれは、「その作品の著者の精神のうちなる作品間のつながりの、技巧的解釈」(Dilthey 1900=1973: 33-4)ではなく、名も無き読者達の精神のうちなるテキスト間のつながりの、技巧的解釈とみなせよう。

Cultural Sociologyの基本的スタンスとして、旧来のマルクス主義者や機能主義者が巨視的抽象的な概念図式の彫琢と混同してきた社会の歴史的・構造的メカニズムの説明は、経験的具体的な「有意味の象徴体系」(Geertz 1973)と関連づけて行わなければならない。「行為者が意味あるものとして理解しているシンボルのパターンとその組織されたセットに入っていくこと」によって「文化を徹底的に理解してはじめて、シンボルシステムと伝統的な社会学的レファレンスとの関係が現実的多次元的に理解できるのである」(Alexander 1992=1996: 133)。

以上の文化をめぐる一連の議論からも明らかなように、90年代以降のアレクサンダーは、当初のシステム論的な枠組を放棄するかわりに言語論的あるいは記号論的な枠組を積極的に導入するようになっており、この点で彼の文化理論は、もはや機能主義の域を超えているのである。

社会の「秩序化(ordering)」よりもむしろ、「内破(implode)」の契機として作用する文化の「内的-動的な自律性」⁶⁾を強調し、さらにそうした「象徴に表現される意味のパターン」(Geertz 1973)の重厚な解釈を目指すアレクサンダーのCultural Sociologyは、後期近代に入って以降、歴史学、政治経済学、人文地理学などを中心にプレゼンスを増してきたCultural Turnの潮流に対する新機能主義側からの返答といえよう。

3. Cultural Sociologyと Cultural Turnの相似性

20世紀後半に抬頭したCultural Turnに呼応するかたちでアレクサンダーが提唱したCultural Sociologyで目指されたのは、既存の

社会学理論のもとで従属変数として付带的に扱われてきた「文化」にかんする概念枠組や分析図式の再定義、ならびに再定式化であった。「何かについて語っている」意味ある記号ないしテキストの集合=シンボリズムとして文化を措定し、これら「広義のコトバ」が人間世界に対して独立変数として作用する説明力の定式化に努めるアレクサンダーのCultural Sociologyは、Cultural Turnにきわめて近接したアプローチを採用しており、もはやそこから、パーソンズ社会学の継承発展という新機能主義の当初のアイデンティティを直接的に読みとることは困難であろう。

より精緻に、理論構成と方法論ふたつの次元で両者の相似性をみた場合、まず理論構成にかんして、Cultural Turnでは、広い意味で「言語的なもの」と措定した文化、すなわち「そのようなシンボル体系がこの世で起こることにいかに関わるかという問題」(Geertz 1983=1999: 57)に強いまなざしが注がれる。一面においてCultural Turnとは、「文化が単に……『社会的なるもの』の因果的な従属物であるとかということではなく、この『社会的なるもの』そのものを『構成』し、『変容』させ『有意味化』させるほどの『自律性(Autonomy)』を有するようになった事態を表している」(大野 2011: 2)。

「社会の文化的構成」という視座は、記号学、言語哲学、構造主義(ポスト構造主義)の抬頭に象徴されるLinguistic Turn(言語論的転回)の流れを汲むものである。ソシュールにせよ、ウィトゲンシュタインにせよ、フーコーにせよ、斯かる20世紀を代表するパラダイムシフトの導き手達は、社会的現実形成の契機としての特質を「狭義のコトバ」に見出したが、社会学者(主に歴史社会学者)も含め、「文化的なるもの」の能動性に着目する現代の研究者達は、狭隘な学問ジャンルの壁を越えて、「言語記号(signe linguistique)」、「言語ゲーム(Sprachspiel)」

「言説 (discours)」といった「概念について慣れ親しんでいる人々から得られる限りの手助けを必要とする」(Geertz 1983=1999: 39) ようになったのである。

いまや「階級」, 「市場」, 「権力」といった社会諸科学における中心的な「分析枠組は、意識や文化または言語に先行するものとしてではなく、それらに依存するものとしてイメージされるようになった。そうした枠組は、社会についての表現 (expressions) あるいは表象 (representations) をとおしてのみ定式化されるのである」(Bonnell and Hunt 1999)。

ひとつの傾向として、「形而上学的な使用から日常的な使用へとコトバを連れ戻す」ことを企図した言語哲学や言説分析がCultural Turnの重要な知的源泉をなしている⁷⁾。「言語的なもの」への照準は、「文化が、つまり意味理解やその構造が(『記号』や『ディスコース』が)、社会的現実それ自体を構成する」(佐藤成基 2010: 100) 自律的な原理の定式化というCultural Turnの理論的特徴を示すものである。

Cultural Sociologyの場合、「独立変数としての文化概念」が基底に据えられている事実には、Cultural Turnとの理論レベルでの相似性を看取することができる。Cultural SociologyがStrong Programの文化理論たり得る最大の所以は、社会関係や社会構造に対して能動的形成という「強力なインプット」を与える文化の力学、すなわち「文化的自律性」という視座にある。「もろもろの経済・政治・社会的な現象が文化(記号・シンボル)によって内的=意味的に構成される」という点を認め、分析や説明の根拠を突き詰める」(大野 2011: vi 傍点: 原著者) Cultural Sociologyは、「社会的なるもの」の説明要因=「根拠」として文化を概念化するスタンスにおいて、生産システムやビューロクラシーなどが「それらの隅々にまで滲透した文化によって根底から構成され、また変容される」

原理を考究するCultural Turnと通底しているのである。

次に方法論にかんして、Cultural Sociologyの擁するStrong Programは、文化をバイナリーな記号の示差的体系として捉えるレヴィ=ストロース流の構造主義的特徴に加え、ナラティヴやシンボルといった「解釈と説明の枠組」、つまり「厚い記述」に不可欠な文化的・言語的コードを導入していることから明らかなように、ギアーツ流の解釈学的特徴を強くそなえている。

一方のCultural Turnも、「人間は自分自身がはりめぐらせた意味の網の中にかかっている動物である」以上、「文化の研究はどうしても……意味を探究する解釈学的な学問に入る」(Geertz 1973=1987: 6) と言明したギアーツを嚆矢とするInterpretive Turn、すなわち「解釈学的転回を受けながら、現代の社会理論のなかに浮上してきた『文化』への新しいまなざしを指して」(吉見 2003: 13) おり、この側面は、理論構成における構築主義的アプローチとともに大きな傾向を示している。例えばV.E. ボネルとL. ハント(Bonnell and Hunt 1999) が、昨今の社会科学について、「象徴的、言語的、表象的体系 (symbolic, linguistic, and representational system)」として文化が概念化されるに従って「全般的に解釈学の一部門」となりつつある一連の動きをあげていることは、まさにCultural Turnの方法論的特徴が、文化という「社会を成り立たせている諸装置に関しては機能主義的説明から決別してさまざまな社会のさまざまな生活についての解釈的説明に向かう動き」(Geertz 1983=1999: 161-2) のなかにあらわれている事実を物語っているといえよう。

ギアーツが、人類学の理論に「厚い記述」のための道具立てという位置づけを与えていたように、アレクサンダーにとっても、「文化的自律性」に着目するStrong Programの文化理論は、パーソンズが、その「制度化」と「内面化」のメカニズムを法則定立的に分析することに終

始した普遍主義的な価値——実質的なレベルでパーソンズが想定していたのは、「自由」と「平等」の概念を柱とするアメリカ型民主主義である——も含め、文化全般がもつ「社会的意味の『解釈』」に関心を注ぐ『文化社会学』の理論」（鈴木 2006：241）であらねばならなかった。

斯かる理論と実践との相即不離な関係が示唆しているのは、ギアーツに倣いテキスト（意味の織物）として措定した文化の「複雑な概念的構造の多重性」（Geertz 1973=1987：16）に焦点をあてるCultural Turnと、「シンボルのパターン」としてコーディングした文化の解釈に関心を向けるCultural Sociologyの間に認められるホモロジカルな関係であり、このことは、両者が後期近代の社会学およびその他の社会諸科学に生じた「意味論的転換」——行為（相互行為）、システム、そして文化にかんする法則性から思念、表象、志向、選択の主体と内容および構造・コンテクストへの重点化——の潮勢に連なるものであるという事実を示している。

4. 意味論的転換とCultural Sociology

4.1. 「意味」へのまなざし—パーソンズ以降の社会学理論

意味論的転換を代表するいずれの社会学理論も、大なり小なり従来の機能主義の超克を企図している。その第一の潮流を担ったのは、社会構造の均衡を重視する「規範的パラダイム（normative paradigms）」（T.P. ウィルソン）や「誇大理論（grand theory）」（C.W. ミルズ）とも揶揄される「概念図式のスコラの精緻化」（高坂 1986：351）といったパーソンズ社会学が孕む傾向を問題視したミクロ社会学であった。

たしかにパーソンズは、文化とりわけ規範ないし価値の体系を、広範に「制度化」され、また「内面化」された社会的に編成済みの存在として、初発から行為システムの秩序化要件に定位している。こうした目的論的な文化認識に

対して、ミクロ社会学は「人間を文化的価値に従属させることになる」（丸山 1986：34）として、「個人の主体性の復権」を掲げたのである。例えば、H.G. ブルーマーら象徴的相互作用論者は、「持続的な秩序の確立」過程を規範の共有化による行為の規制という観点から強調したパーソンズに抗し、行為にそなわるコンティンジェントな部分、すなわち個人（パーソナリティ）の自発的な解釈に依拠した相互作用をとおして、既成の社会的な機構や制度、ルールが修正あるいは変革されていく側面を重視した（船津・宝月 1995）。つまりミクロ社会学の文脈において、人間は、すでに確定された規範や役割をただ受容するだけの機械的存在ではなく、むしろ不断の「意味付与」過程をとおして、それらを積極的に再形成していく主体的存在として捉えなおされたのである。

また、概念図式のスコラの精緻化という点にかんして、パーソンズの用いる枠組は、研究者という権威的＝外在的な視点から導出されたものであり、その過度に複雑で抽象的な理論構成に対しては、日常生活を営む人びとの主体的および主観的側面の分析に有効ではないとする声が新しい世代の社会学者から寄せられるようになる。とくに「意味学派」とも総称されるミクロ社会学の諸勢力は、研究者の頭のなかで仮構された説明図式を特定の事例に適用する演繹法的アプローチにかんして、経験的現実から遊離してしまうことへの懸念を示す一方で、行為者が現実思念している意味を本人の内側に立ち入って理解しようと努めた。ミクロ社会学の立場が「解釈的パラダイム（interpretive paradigms）」（T.P. ウィルソン）と呼ばれるのも、M. ウェーバーの「理解社会学（Verstehende Soziologie）」を、より経験的・実質的な「活動」というレベルで試みる了解的アプローチ——参与観察やライフヒストリー研究が重用される——によるところが大きい。

日常生活世界の当事者を理解の対象として第

一義化する象徴的相互作用論者や現象学的社会学者達にとって、あくまで科学的な概念モデルは、「活動に対する道具的な有効性を持つ」(Blumer 1969=1991: 216) べきものであるし、「人間行為の主観的な意味を客観的に取り扱うための方法」(Schutz 1973=1983: 97) として、ほかならぬ「行為者自身によっても彼の仲間によっても日常生活の常識的解釈によって理解できるものであるように構成されていなければならない」(Schutz 1970=1980: 302)。つまりミクロ社会学の方法論的眼目は、所謂「普通の人びと」が日常的に抱く観念や感情、常識の世界を、当事者達の視点から描き出す主観主義にある。

意味論的転換の第二の潮流は、「支配的な社会学」の内部で70年代から80年代前半にかけて興った。そこで目指されたのは、社会的行為の領域を内集団や小集団に局限したミクロ社会学が説明しきれなかった「意味の公共性」と「社会全体の意味的編成原理」の理論化である(今田 1990)。

マルクス主義の立場からはフランクフルト学派第二世代を代表するハーバーマスがあげられる。初期の批判社会学からコミュニケーション論への思想的変遷の結実である『コミュニケーション的行為の理論』(1981)における彼の関心は、「システムによる生活世界の植民地化」打開の鍵をにぎるコミュニケーション的合理性がいかにして可能かという問題はむろんのこと、それと関連して行為者の意味および意味理解が認識対象として狭隘化ないし後景化されることのない社会概念(生活世界)をいかに担保するかという問題にも向けられていた。

コミュニケーションに対するハーバーマスの意味論的関心は、「社会的行為の一般理論はいかにして可能か」というプロブレマティークを提起した『社会科学の論理によせて』(1970)のなかですでに明示されていたが、そこでは第一に、社会や文化=規範に制御あるいは統合さ

れた与件として意味を矮小化するパーソンズの機能主義的社会学の克服が目指された。同著でハーバーマスは、「理解社会学」を充実させるための方途として、いずれも「意味理解の領域を主題的に問題化している」(武田 2003: 258) ①シュッツらの現象学的アプローチ、②ウィトゲンシュタインの言語学的アプローチ、③ガダマーの解釈学のアプローチの検討を試みる。まず①は、「間主観性(Intersubjektivität)」の概念があくまで行為者本人の「自己解釈作用」に基礎づけられた意識内在的な他者理解の水準にとどまっているという難点ゆえに、言語的コミュニケーションというフィジカルかつアクチュアルな相互了解の水準で同概念の再獲得が見込まれる②によって補完され、次に②は、「言語において人間は一致する」(Wittgenstein 1958=1976: 176) という場合、そこでの認識の一致が、同じ言語行為規則の世界に属する主体同士に局限されるという難点ゆえに、「解釈学的な相互了解は諸地平の融合というイメージにおいて表現される」(Habermas 1970=1991: 268) ③によって補完される。

かくしてハーバーマスは、解釈学的循環を歴史的地平(テキストが解釈者に対して示してみせるそれが記された当時の世界)と現在の地平(テキストの解釈者がそれを読む際に自己を具体的に位置づける現在の世界)との「融合(Verschmelzung)」という見地から把握するガダマーの哲学的解釈学の省察をとおして、「コミュニケーション的経験(kommunikative Erfahrung)」の可能性を異なる言語行為規則の世界(過去時制のかたちで表される他文化圏)に属する主体との相互了解の域にまで敷衍しようとした。すでにこのときからハーバーマスによる理論化の努力は、時代と場所を超えた他者理解の核をなす「意味の公共性」に向けられていたのである。

意味論的転換の震源地となった「支配的な社会学」を代表するいまひとつの立場が、ルー

マンの機能主義である。パーソンズ社会学の批判的検討に基礎づけられたルーマン・システム論の鍵概念は、「オートポイエシス (Autopoiesis)」, 「複雑性 (Komplexität)」そして「意味 (Sinn)」である。

まずオートポイエシス概念は、生物学や論理学の知見に準拠しているとはいえ、あくまで複雑に機能分化した近代社会の「世界構成」という社会学的関心のもとで再構築されたものである。ルーマンが社会システムというとき、「政治」, 「経済」, 「法」, 「教育」, 「宗教」といった複数のシステムに分化されているとみなす点では従来の機能主義と同様だが、パーソンズがAGILとサイバネティック・コントロール・ハイラーキーの考えにもとづき、諸システム間の機能的関係を階層的に捉えたのに比して、同関係を相対的なものとして捉えなおしている(いずれのシステムも相互に自律した「環境」という位置づけを与えられている)。

ルーマン (Luhmann 1984) にとって社会システムとは、パーソンズ (Parsons and Shils eds. 1951) にとってのそれ——「制度化」された価値=規範を中心として、均衡状態を自力で維持するために必要不可欠なあらゆる条件を内部にそなえる「自己保存的な」体系——とは異なり、その構成要素を産出するネットワークが、構成要素自体の相互作用を通じて不断に産出され実現されていくオートポイエティックな、すなわち「自己言及的な (自己準拠的な)」体系を指している。ここで強調されているのは、システムという統一体のみならず、その単位をなすいかなる要素、過程、境界もシステム自身によって再生産される円環的な性質であるが、なかでも「複雑性」の問題に関与しているとされるのが、社会システムの「基礎的単位」としてのコミュニケーションである。

ルーマンは、情報 (発信するメッセージの内容)、伝達 (発信に際しての目的と意図)、理解 (情報/伝達の差異の認識) という三つの選択的な

局面の総合としてコミュニケーションを定義する。ここで留意しなければならないのは、自我-他我間の相互理解 (コンセンサス) をコミュニケーションの成立条件に定位したハーバーマスの場合、言語的メッセージの「送り手」と「受け手」はともに欠くべからざる存在として自明化されているのに比して、ルーマンの場合、いずれの主体も彼の考えるコミュニケーションの自己準拠的な過程のもとでは、むしろ後景化されているという点である。先行するコミュニケーションにおいて、情報と伝達との差異を「理解」し、次に何がどう語られるべきかを判断すること、いうなれば三つの選択的な局面の総合が第二、第三のコミュニケーションの契機もしくは前提になるということは、「送り手」と「受け手」双方ともに、後続するコミュニケーションの文脈や状況に応じて再措定される「選択的な」存在にすぎないということである。

ところでコミュニケーションは、「複雑性の縮減」という、当事者の意図や動機よりも「はるかに豊かな」社会システムの特性によって可能となる。このとき同特性の発現に深くかわっているのが「意味」である。社会システムが存続していくうえで求められるのは、システムをそれらの統一体たらしめているコミュニケーションの持続的=接続的な実現、すなわち「作動 (Operation)」である。

この「コミュニケーションによるコミュニケーションの自己産出」が正常に展開されるためには、現実的で妥当な選択が逐次行われる必要がある。「複雑性」とは、情報・伝達・理解の各局面でとられ得る選択の可能性が文字通り“過多”であることを指しており、斯かる所与の状況のもとで、システム自身が再構成している諸行為はそのつど選択を余儀なくされる。このとき「意味」は、「強制された選択という不可避な条件のもとで、複雑性を処理する新たな強力な形式」(Luhmann 2012=2016: 49傍点: 原著者) として機能する。具体的に「意味」は、

濫立過剰な選択肢のなかから、ありそうにないもの（実現の確率の低いもの）を排除して、ありそうなもの（実現の確率の高いもの）の選択が可能になるように絞り込むことでコミュニケーションが孕むリスク（不確定性・不確実性）を抑制している。つまり社会システムは、選択に「根拠」を帰属させる（選択に方向づけを与える）「意味」の機序をとおして、「作動」の過程を安定化させ、結果的にコミュニケーションの総体であるおのれ自身をも構成しているのである。

附言すべきは、コミュニケーションの主要なメディアとして想定されている言語の「根源的機能」について、ルーマンが、「意味」それ自体の再生産を可能ならしめる「自己関連づけ」をあげている事実である。「意味の自己準拠的な処理は、シンボリック一般化を必要不可欠としている」（Luhmann 1984=1993:142 傍点：原著者）というとき、状況に制約されない普遍的な社会的行為のための再使用という水準における言語の「同一性」——文化システムの母体としての位置づけを言語に与えたパーソンズ（Parsons 1961）によって看破されていたもの——ではなく、オートポイエティックな産出に際して、「意味」がその存在を自己に絶えず関連づけていくための再使用という水準における言語の「同一性」を指している。

さらにルーマンが、「その他すべてのものを含む、あらゆる社会システムのなかでもっとも重要なもの」として「全体社会システム」に言及するとき、従来のシステム論で前提とされてきた特定の都市や国家を想定していない事実は、意味論的転換の性向をみるうえで着目に値する。ルーマンにとっての社会システムは、そのじつコミュニケーション・システムといっても差し支えないが、全体社会システムとは、すべてのコミュニケーションを内包し、かつそれらを再生産している包括的システムにはかならない。彼によれば、機能分化が著しく進む近代社

会では、国家という領土的準拠点を依然として保有している「政治」を例外として、多くのサブシステム——とくに「経済」や「科学」——は地球全体に拡大しているという。つまり近代社会は、ナショナルな地理的境界を越えた「世界社会（Weltgesellschaft）」の様相を呈している点で「まったく新しいタイプのシステムとなり、前代未聞の高度の複雑性を構築するにいたった」（Luhmann 2012=2016:199）のである。

「コミュニケーションにもとづく自己言及的システム」という社会システムの基本前提に立てば、近代社会が直面する「前代未聞の高度の複雑性」は、グローバルなコミュニケーション・ネットワークの展開にとってきわめて強力な桎梏ということになる。ここで重要なのは、個々のシステムがそうであるように、全体社会システムの維持も「作動」の安定に不可欠な「意味」に依拠しているという視点である。したがってルーマンは、彼流のシステム論の地平から、「社会全体の意味的編成原理」の定式化を模索していたと評価できるのである。

4. 2. Cultural Sociologyの課題

—「社会的なるもの」の所在

本節ではここまで、社会学における意味論的転換の潮流を拙速ながら通観してきたが、「文化的自律性」の視座から社会の「意味的編成原理」を定式化し、生活世界の異なる他者（同時代人や先行者）を理解するうえで鍵となる「意味の公共性」を「厚い記述」——本来の解釈人類学では、「異質な他者」であるインフォーマント（現地人）が自明裡に解釈している（解釈していた）シンボルに対して、当該の習俗や儀礼を観察するエスノグラファーが二次的に行う解釈、つまり「解釈についての解釈」を指す——によって開示せんとするアレクサンダーのCultural Sociologyも、それらCultural Turnときわめて類比的な理論的・方法論的コミットメントに鑑みて、同潮流の文脈で言及されるべき

ものであろう。

社会科学の広範な分野にまたがる意味論的転換の背後に、1960年代後半を皮切りとするオートロジカルな社会変動（五月革命～公民権運動～冷戦終結～グローバリゼーション）が横たわっていることは厳然たる事実であり、本稿で重点的にとりあげたCultural Sociologyにしても、そういった時代のうねりのなかで抬頭した「西欧の文化論」から多大な示唆を受けている。

しかしながら、文化の研究がもはや厳密な意味での実証主義的な学問たり得ないとしても、集団、組織、制度に対する記号、イメージ、シンボルの根源的=内的な自律性（言語的・言説的な構成原理）を重視しすぎれば、「社会的なるもの」のサブスタンシャルな存立根拠を問えなくなり、文化決定論の袋小路に入り込むことになる。われわれは、文化の編成や再編といった物質的・手段的な社会諸形態（市場、権力）が及ぼすインパクトに照準する従来の社会科学の視座をただちに放棄すべきではない。

むしろ求められるのは、社会を「文化の説明要因」として扱ってきたSociology of Cultureと文化を「社会の説明要因」として強調するCultural Sociologyとの協働の道ではあるまいか。その過程において、文化と社会の関係は相互に「強力なインプット」を付与しあう動的連関のうちに捉えかえされることになろう。ただし、斯かる相互構成的な原理（相対的自律性）の定式化は、無限の循環論法に陥らないように十分配慮しながら行う必要があり、茨の道となることが予想される。

注

- 1) ミクロ社会学諸派によるパーソンズ批判は、社会的に期待される役割に自己を順応させる受動的な人間観に対しても向けられるが、この側面から行為者の主体性を強調するスタンスは、例えば、E.ゴフマン（Goffman 1961）の儀礼的相互行為論に見出すことができる。彼の提唱した「役割距離（role distance）」や「印象操作

（impression management）」の概念には、ただ周囲からの役割期待を全面的に引き受けるのではなく、自らの意志で自分の取るべき態度と行動を取捨選択し、他者に与える印象をパフォーマンスに操作する能動的な人間観が反映されている。

- 2) パーソンズは、当初からパーソナリティを特定の集合体のもとに接合させる文化システムの規範的要素に分析上、特別な意義を見出していたが、後期に至り、斯かる「制度化」された共通の価値に基礎づけられる文化システムそのものを、ほかのより低次の行為システム（集合体、パーソナリティ、身体）を上方から制御する本質的な（constitutive）存在に位置づける。実際に彼は、規範的な文化システムこそが、サイバネティック・ハイアラーキーの「最高次のコントロール要因」であるという事実を強調するその一点にかぎり、「私は社会決定論者というよりもむしろ文化決定論者である」（Parsons 1966=1971: 169）と自称している。
- 3) M.オル（Orri 1988）は、アメリカ社会学会発行の『現代社会学』（*Contemporary Sociology*, 1988）に掲載された諸論稿について「パーソンズ社会学の熱狂的な再評価の試み」と総評し、そのような動きに象徴される「パーソンズ・リバイバルこそ、1980年代の社会学における顕著な特徴のひとつとなっている」と結論づけたが、アレクサンダーは、自身の『社会学の理論論法』の位置に堪えて、アメリカにおけるパーソンズ・リバイバル、すなわちパーソンズの継承発展を掲げた理論運動の本格的な始動という「事件が起こる前の予告、前兆と考えてほしい」（Alexander 1990=1996: 42）と述べている。
- 4) 実際にアレクサンダーは、集合主義的な社会学理論と個人主義的な社会学理論双方の活性化という観点から、ミード、ゴフマンらの象徴的相互作用論や、シュッツおよびガーフィンケル（初期）らの現象学的社会学について、「個人主義的伝統における集合主義的要素がほとんど無視されてしまう」と批判し、パーソンズの理論に代表されるマクロ社会的知見を取り入れる必要性を強調する。またその一方で、自身を含む新機能主義者達が、ミクロ社会学の諸言説を導入しはじめたことについて、「このような個人主義的理論の取り入れは、正統派機能主義に欠けていたものを埋めるべく提出されたものであった。ネオ機能主義的プロジェクトのオリ

ジナリティ、創造性、総合性を高めるべく、コンテンツジェンシー、主意主義が取り上げられねばならないのである」(Alexander 1990 = 1996 : 66) と主張する。

- 5) 例えばアレクサンダー (Alexander 1987) は、文化的問題と人生の意味 (meaning of life) との関係性をテーマに据えるギアーツの宗教研究について、解釈学の地位を向上させたと評価するとともに、そのような意味が問題の中心にあるとみなされるがゆえに、文化的自律性 (cultural autonomy) の視点が確保されていると指摘する。
- 6) 正統派機能主義 (旧機能主義) の魁首であるパーソンズの場合、「社会編成」に深くかかわる「説明力としての『文化』概念が原理的なレベルで現れている」(大野 2011 : 12) もの、既成の社会構造や社会関係の再編まで射程に入れるアレクサンダーに比して、あくまで「秩序化」(行為の制御による社会統合) の原理を強調していた。実際に文化システムの諸要素のなかでも「価値志向の道徳的標準」(Parsons and Shils eds. 1951) と呼称される共通の価値 = 社会規範は、「制度化」と「内面化」をとおして「複数の行為者に共通する行動基準を与え、彼らの相互作用を安定させ、社会 (体系) に統合をもたらす重責をせおわされている」(小川・霜野 1981 : 93)。この点で文化 = 価値の体系は、デュルケム (Durkheim 1893) のいう「契約の前契約的要素」のごとく、複数の行為者を共通の仕方から半ば強制的に (拘束的に) 規制しているのである。いわばパーソンズ社会学において想定されている「文化的自律性」とは、「外的 - 静的な自律性」とみなすべき社会秩序の説明力なのである。
- 7) 一方で、Cultural Turnの思想的出自が「現実世界の意味構成」を問う共通のスタンスにおいてディルタイ以来の哲学的解釈学からライルらのアメリカ・プラグマティズム、ランガーやカッシーラーの思想に代表される表象主義的アプローチ、フレーゲとラッセルに端を発する分析哲学まで多岐にわたるとの見方もある (佐藤成基 2010)。斯かる視点に立脚すれば、Cultural Turnは後期近代に特有のパラダイム転換というよりも、20世紀西洋思想全体の動向を指しているといっても大過なからう。

参考文献

- Alexander, J.C., 1980, "Core Solidarity, Ethnic Group, and Social Differentiation : A Multidimensional Model of Inclusion in Modern Societies," Jacque Dofny and Akinsola Akiwowo, eds., *National and Ethnic Movements*, Beverly Hills : Sage. (=1996, 鈴木健之訳「コア連帯、エスニック外集団、社会分化」鈴木健之編訳『ネオ機能主義と市民社会』恒星社厚生閣, 99-128.)
- , 1983, *Theoretical Logic in Sociology*, Vol.4, Berkeley, Los Angeles : University of California Press.
- , 1984, "Three Models of Culture and Society Relations : Towards an Analysis of Watergate," *Sociological Theory* 3, 290-314. (=1996, 鈴木健之訳「文化と社会諸関係の三つのモデル——『ウォーターゲート』分析の試み」鈴木健之編訳『ネオ機能主義と市民社会』恒星社厚生閣, 75-98.)
- , 1986, "The "Form" of Substance : The Senate Watergate Hearings as Ritual," Sandra J. Ball-Rokeach, Muriel G. Cantor eds., *Media, Audience and Social Structure*, Newbury Park, Calif. : Sage, 243-251.
- , 1987, *Twenty Lectures: Sociological Theory Since World War II*, New York : Columbia University Press.
- , 1988a, "Action and Its Environments," Jeffrey C. Alexander, Bernard Giesen, Richard Münch, Neil J. Smelser eds., *The Micro-Macro Link*, Berkeley : University of California Press, 289-318. (=1998, 若狭清紀訳「行為とその環境」石井幸夫他訳『「知」の扉をひらく ミクロ・マクロ・リンクの社会理論』新泉社, 179-222.)
- , 1988b, "Culture and Political Crisis: 'Watergate' and Durkheimian sociology," Jeffrey C. Alexander ed., *Durkheimian sociology : cultural studies*, New York : Cambridge University Press, 187-224.
- , 1990, "Neofunctionalism Today : Reconstructing a Theoretical Tradition (with Colomy, P)," George Ritzer, ed., *Frontiers of Social Theory : The New Syntheses*, New York : Columbia University Press. (=1996,

- 鈴木健之訳「ネオ機能主義の現在——理論的伝統の『再構成』」鈴木健之編訳『ネオ機能主義と市民社会』恒星社厚生閣, 40-74.)
- , 2003, *The Meaning of Social Life: A Cultural Sociology*, New York: Oxford University Press.
- Blumer, H.G., 1969, *Symbolic interactionism; perspective and method*, Englewood Cliffs: Prentice-Hall. (=1991, 後藤将之訳『シンボリック相互作用論—パースペクティブと方法』勁草書房.)
- Bonnell, V. E and Hunt, L 1999, "Introduction," V.E. Bonnell and L. Hunt, eds., *Beyond the Cultural Turn: New Directions in the Study of Society and Culture*, Berkeley/Los Angeles/London: University of California Press, 1-32.
- Dilthey, W., 1900, "Die Entstehung der Hermeneutik," *Philosophische Abhandlungen*, Christoph Sigwart zu seinem 70. Geburtstag 28 März 1900, Tübingen 1900, 185-202. (=1973, 久野 昭訳『解釈学の成立』以文社.)
- Durkheim, È., 1893, *De la division du travail social*, Paris: Félix Alcan. (=1971, 田原音和訳『社会分業論』青木書店.)
- , 1912, *Les Forms élémentaires de la religion: le système totémique en Australie*, Paris: Presses Universitaires de France. (=1975, 古野清人訳『宗教生活の原初形態』上・下 岩波書店.)
- 船津 衛・宝月 誠編, 1995, 『シンボリック相互作用論の世界』恒星社厚生閣.
- Geertz, C., 1973, *The Interpretation of Cultures Selected Essays*, New York: Basic Books. (=1987, 吉田禎吾・中牧弘允・柳川啓一訳『文化の解釈学』I 岩波書店.)
- , 1983, *Local Knowledge Further Essays in Interpretive Anthropology*, New York: Basic Books. (=1999, 梶原景昭・小泉潤二・山下晋司・山下淑美訳『ローカル・ノレッジ——解釈人類学論集』岩波書店.)
- Goffman, E., 1961, *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*, Indianapolis: Bobbs-Merrill. (=1985, 佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い——相互行為の社会学』誠信書房.)
- Habermas, J., 1970, *Zur Logik der Sozialwissenschaften*, Verlag: Suhrkamp. (=1991, 清水多吉・波平恒男・木前利秋・西阪 仰訳『社会科学の論理によせて』国文社.)
- 今田高俊, 1990, 「意味と社会システム 第7号特集へのコメント——社会理論における言語論的・意味論的転換」今田高俊・橋爪大三郎『理論と方法』数理社会学会5 (2): 105-116.
- 高坂健次, 1986, 「ネオ・ファンクショナリズム——1980年代のアメリカ社会学」碓井 崧・大野道邦・丸山哲央・橋本和幸編著『社会学の焦点を求めて』アカデミア出版会, 344-361.
- Luhmann, N., 1984, *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Frankfurt: Suhrkamp. (=1993, 佐藤 勉監訳『社会システム理論』上 恒星社厚生閣.)
- , 2012, *Essays on Self-Reference*, New York: Columbia University Press. (=2016, 土方 透・大澤善信訳『自己言及性について』ちくま学芸文庫.)
- 丸山哲央, 1986, 「社会的行為」碓井 崧・大野道邦・丸山哲央・橋本和幸編著『社会学の焦点を求めて』アカデミア出版会, 12-37.
- 小川浩一・霜野寿亮, 1981, 『機能主義的社会学再考——文化と価値の理論をめざして』啓文社.
- 大野道邦, 2011, 『可能性としての文化社会学——カルチュラル・ターンとディシプリン』世界思想社.
- Orru, M., 1988, "Review of Talcott Parsons: On Economy and Society (by Robert J. Holton and Bryan S. Turner) and The Integration of Economics and Sociological Theory (The Marshall Lectures, Cambridge University 1953)," *Contemporary Sociology* 17: 115-117.
- Parsons, T., 1961, "Introduction to Part 4 (Culture and the Social System)," in T. Parsons, E.A. Shils, K.D. Naegle and J.R. Pitts, eds., *Theories of Society: Foundation of Modern Sociological Theory*, New York: The Free Press. (=1991, 丸山哲央訳『文化システム論』ミネルヴァ書房.)
- , 1964, *Social Structure and Personality*, New York: Free Press. (=1973, 武田良三監訳『社会構造とパーソナリティ』新泉社.)
- , 1966, *Societies: Evolutionary and Comparative Perspectives*, New Jersey: Prentice Hall. (=1971, 矢沢修次郎訳『社会類型——進化と比較』至誠堂.)

- Parsons, T and Shils, E. A eds., 1951, *Toward a General Theory of Action*, Cambridge : Harvard University Press. (=1960, 永井道雄・作田啓一・橋本真訳『行為の総合理論をめざして』日本評論新社.)
- Parsons, T and Platt, G.M., 1973, *The American University*, Cambridge : Harvard University Press.
- 佐藤成基, 2010, 「文化社会学の課題——社会の文化理論にむけて」『社会志林』法政大学社会学部学会, 56 (4) : 93-126.
- 佐藤 勉, 1997, 「新機能主義」井上 俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『岩波講座 現代社会学 別巻——現代社会学の理論と方法』岩波書店, 249-256.
- Saussure, F. de, 1910-1911, *3ème Cours de Linguistique Générale*, Geneve : Bibliothèque Publique et Universitaire. (=2007, 影浦 峽・田中久美子訳『ソシュール 一般言語学講義 コンスタンタンのノート』東京大学出版会.)
- 鈴木健之, 1997, 『社会学者のアメリカ』恒星社厚生閣.
- , 2006, 「ネオ機能主義から文化社会学へ——アレクサンダーの社会学の展開」富永健一編『理論社会学の可能性——客観主義から主観主義まで』新曜社, 236-252.
- , 2014, 「機能主義, ネオ機能主義, 文化社会学——ジェフリー・アレクサンダー『社会学の理論論法』刊行30周年に寄せて」『目白大学短期大学部研究紀要』目白大学50 : 145-157.
- 武田朋久, 2003, 「ハーバーマス方法論における解釈学的アプローチ」『創価大学大学院紀要』創価大学大学院, 25 : 257-272.
- Wittgenstein, L., 1958, *Philosophische Untersuchungen*, Oxford : Basil Blackwell. (=1976, 藤本隆志訳『ウィットゲンシュタイン全集8 : 哲学探究』大修館書店.)
- 吉見俊哉, 2003, 『カルチュラル・ターン——文化の政治学へ』人文書院.
- (しらいし てつろう
佛教大学社会学研究科博士後期課程)